

“被”構文における状語の描写対象

伊 藤 さとみ

1. はじめに

中国語では、動作者が動作を行う際の心理状態、特にその動作をどういう心理状態で行ったかということ、状語によって表わす。

- (1) 医生保证安全无虞，我因答应在前，实在不好临时逃跑，所以不情不愿地还是上了飞机。¹⁾ (医者が安全で心配がないことを保証したので、私は先に承諾してしまったこともあり、実際急に逃げ出すわけにも行かず、いやいやながらやはり飛行機に乗った。) (北)
- (2) 我对大家说了这样的意见，他们都乐意地接受了。(私はみんなにこのような意見を述べると、みんな喜んで受け入れてくれた。) (北)

上の例において、(1) では、“不情不愿地”という状語が、“我”が飛行機に乗る際の気持ちが「いやいやながら」であることを表している。(2) では、“乐意地”という状語が、主語である“他们”が“接受”という動作をする際の気持ちが「喜んで」であることを表している。以上は動作主の気持ちを表した例だが、これらの状語が、“被”構文に現れると、被動作主の気持ちを表すこともある。

- (3) 在这华人女子不情不愿地被警察带走之后，该女子的男朋友廖先生讲述了事情的经过。(この中国人の女の子が、いやいやながら警察に連れて行かれた後、当の女の子の彼氏の廖さんが事情を話した。) (ネ)
- (4) 他们非常乐意地被我采访。(彼らはとても喜んで私にインタビューされた。) (ネ)

上の二つの例では、“被”構文に状語が現れている。(3) では、“这华人女子”、

(4) では“他们”がそれぞれ状語の描写対象であり、いずれも“被”構文の主語、つまり被動作主である。だが、“被”構文において必ず被動作主主語がこの種の状語の描写対象になるというわけでもない。

- (5) 外祖父看见我去意坚定，行李也打好了，就对父母说：“你们也不要那么担心，她那种硬骨头，谁也不会爱去啃她，放她去走一趟啦！”总司令下了命令，我就被父母不情不愿地放行了。（母方の祖父は私の留学の意志が固く、荷物もまとめたのを見て、両親に言った、「君たちはそんなに心配する必要はない、彼女のあの頑固さでは、だれも好んでとって食おうとしないだろう。一回行かせてやりなさい！」総司令官が命令を下すと、私は父母にいやいやながらも許してもらった。）（北）
- (6) 父母这样的要求根本不可能被乐意地接受，父母的权威其实也一点点地消耗掉。（父母のこのような要求は、喜んで（子供に）受け入れられるはずは絶対になく、父母の権威も実際少し落ちてしまう。）（ネ）

上の二つの例では、状語が“被”の後に現れており、描写の対象も(5)では“被”の直後にある名詞句“父母”、(6)では文脈から補われ、“接受”という動作をする人（この場合、子供）であり、いずれも“被”の後に現れた動作主がその動作をする際の心理状態の描写となっている。

このように、状語の描写する対象は、その状語が能動文に現れるか、“被”構文に現れるか、また、“被”構文においても、“被”の前に現れるか、後に現れるかによって異なってくる。この現象に対し、伊藤2010では、動作が行われる際の心理状態を表す状語を5つのタイプに分け、それぞれのタイプの意味と修飾先の決定方法を示した。だが、その分析には二つ問題があった。一つは、状語のタイプ分けを、収集した例文によってのみ行い、インフォーマント調査による非文の判定を行わなかったため、分類として不十分であったこと、もう一つは、“被”構文に対して英語の受動文に対応するような構造、即ち“被”を介詞と見なす文構造を設定しており、近年の“被”構文の分析の成果を取り入れていなかったことである。近年の中国語の“被”構文研究では、大きく分けて二種類の構造が提案されており、いずれも英語の受動文の分析とは大きく

異なったものである。そこで、本稿では、まず、インフォーマント調査を行い、状語の分類を再考するとともに、“被”構文に対して近年提案されてきた構造に基づいた分析を提案する。

2. “被”構文の構造

“被”構文について、よく見られる分析は、“被”を前置詞（＝介詞）と見なし、対応する能動文の目的語が、受動文では移動して主語になったと見なすものである。（以下の t は名詞句が移動した後の痕跡を表す。）

(7) 张三_i被李四批评了 t_i 。（張三は李四に批判された。）

ところが、“被”は前置詞とは言い難い振る舞いもする。例えば、(8)のように“被”が名詞句を伴わない場合があるが、中国語では前置詞残留が一般に許されない点を考慮すると、この“被”は前置詞とは言えない。

(8) 张三被批评了。（張三は批判された。）

そこで、黎锦熙 1924、吕冀平 1983 などは“被”に二重の地位を与える考え方を提案している。即ち、後ろに動作主が現れているときは前置詞、現れていないときは受動態のマーカ―であるとするものである。近年では、Shi（＝石定栩）1987、石定栩 2005 がこの考えの流れを汲み、“被”には前置詞と受動態のマーカ―の 2 種類があり、それらが二つ同時に現れることも可能であって、その際には同音削除の操作を受けて一方が削除されているという分析を提案している。

この分析に対し、Tang（＝邓思颖）2001 は、Shi 1987 があげた根拠に対し、一つ一つ反例をあげて、“被”に二重の文法的地位を与えることに反論している。実際、生成文法の研究者の間では、“被”に二重の地位は与えられてはいない。一般には“被”は前置詞ではなく、動詞またはそれに準ずるものとして扱われている（冯胜利 1997、Ting 1998、Huang 1999、Tang 2001、吴庚堂 1999、2000、熊仲儒 2003）。“被”を動詞の一種と見なしたとき、“被”に後続する要素の位置づけが問題になるが、一般に“被”は節または動詞句を補部にとっていると見なされる。つまり、“被”に後続する名詞句は、節／動詞句の主語と

して扱われる。この構造は、以下の二つの点で優れている。一つは、(9a) のような“被”の後に現れた名詞句が、後続要素の主語として振る舞っており、“被”と一つの構成素をなしていないことである。

(9) a. 张三被财主放狗咬坏了。(張三は金持ちに犬を放たれて咬まれた。)

b. *张三被狗财主放咬坏了。(*張三は犬に金持ちが放って咬まれた。)

(9a) において、“財主”は“放”という動作をするものであり、“咬坏”の動作主ではない。“咬坏”の動作主は“狗”であるが、(9b)のように“狗”は“被”の後に現れることはできない。従って、動作主を導く前置詞“被”という考え方では、この例文を説明できない。一方、“被”を動詞と見なし、“財主～”の節がその目的語になっていると見なせば、問題なく解釈できる。もう一つの優れた点は、“被”構文には、(10)のような残留代名詞が現れることがあるが、埋め込み節を仮定することで、束縛原理 B、即ち代名詞はその現れた統率領域(ここでは節)の中で束縛されてはいけないという原理に違反せずに済むことである。

(10) a. 张三被李四打了他一顿。²⁾(張三は李四に彼は一度殴られた。)

b. *_{[TP 张三_i [VP [PP 被李四] 打了 他_i 一顿]]}

c. _{[TP 张三_i 被 [TP [VP 李四 打了 他_i 一顿]]]}

(10a) の例文に対し、(10b) のような構造では、代名詞“他”が同一節内にある主語“张三”に束縛されてしまい、束縛原理 B に違反する。もし (10c) のように動詞“被”が節を選択する構造ならば、代名詞“他”はこの埋め込み節内では自由であり、束縛原理 B に違反しない。(10a) が容認可能な例文であることから、構造としては束縛原理 B に違反しない (10c) を立てる方がよい。

この新しい構造を認めると、中国語の受動文の生成も考え直す必要が生じる。まず、“被”構文が名詞句の A 移動、即ち、目的語位置から主語位置への移動によって生成されるなら、この移動は長すぎるという問題がある。例えば、(11a) のような“被”の後に使役動詞がある場合、(11b) のように、“张三”が使役節の中から主語位置にある他の名詞句 (PRO と“李四”) を飛び越えて移動するのは、A 移動に一般に課せられる局所性の制限に違反している。そこで、

(11c) のように移動しているのは演算子 (OP) であり、移動の種類も A' 移動、即ち項以外の位置への移動であるということが提案された。この構造においては、演算子が空所を束縛し、主語名詞句と演算子が同一指標を持つことにより、受動文の解釈が得られる。

- (11) a. 张三被李四派我抓走了。(張三は李四が私を派遣してとらえられた。)
 b. * $[_{TP} \text{ 张三}_i \text{ 被 } [_{TP} [_{VP} \text{ 李四 派 我 } j \text{ } [_{TP} \text{ PRO}_j \text{ 抓走了 } [e_i]]]]]$
 c. $[_{TP} \text{ 张三}_i \text{ 被 } [_{TP} \text{ OP}_i \text{ } [_{VP} \text{ 李四 派 我 } j \text{ } [_{TP} \text{ PRO}_j \text{ 抓走了 } [e_i]]]]]$

以上は動作主の現れた“被”構文に対する分析だが、動作主の現れない“被”構文には、この分析は適用されない。なぜなら、動作主の現れない“被”構文には、残留代名詞が現れることができないからである。(以後、動作主の現れた“被”構文を長い“被”構文、動作主の現れない“被”構文を短い“被”構文と呼ぶ。)

- (12) *张三被打了他一顿。(*張三は彼は一度殴られた。)

この問題に対する解決方法は、研究者により異なっている。冯胜利 1997 では、短い“被”構文においては、(13) のような“被”と動詞を合成語と見なす再分析が行われると考えている。再分析が行われると、(14) のように主節の主語と残留代名詞は同一の節内にあることになり、束縛原理 B によって非文になる。

- (13) $[_{VP} \text{ 被 } +e+V] \rightarrow [_V \text{ 被 } V]$
 (14) * $[_{TP} \text{ 张三}_i \text{ } [_{VP} \text{ 被打了 他}_i \text{ 一顿}]]$

これに対し、吴庚堂 2000 は、長い“被”構文の方に特殊性があると考えている。つまり、本来“被”は動詞に格付与能力を失わせ、目的語をとれなくするのだが、長い“被”構文においてのみ、動詞は格付与能力を回復して残留代名詞をとるというものである。だが、格付与能力を回復した後も、項としてとれるのは主語と同一指示の残留代名詞のみであり、自由に名詞句をとれるわけではないことを考慮すると、あまり説得力のある分析とは言えない。一方、Ting 1998 は、冯胜利 1997 の提案した再分析という操作は場当たりのだと批判し、長い“被”構文と短い“被”構文はもともと構造が異なっていると主張している。つまり、長い“被”構文は、CP (本稿では TP に当たる) を補部に

として演算子の A' 移動により生成され、短い“被”構文は、VPを補部にとって名詞句の A 移動により生成される。

(15) [张三_i 被 [TP OP_i [vP 李四 批评了 t_i]]] (張三は李四に批判された。)

(16) [张三_i 被 [vP PRO 批评了 t_i]] (張三は批判された。)

同様に長い“被”構文と短い“被”構文に異なる派生を仮定するものに、邓思穎 2004、2008 がある。短い“被”構文の分析について、動詞の能格化による目的語の消失とエッジフィーチャーによる主語名詞句の挿入という新しい見解を提示しているが、おおよその構造及び長い“被”構文を演算子移動で派生する考え方は Ting1998 と同じである。

まとめると、“被”構文には、“被”を前置詞とするものと受動態をマークする動詞性成分とするものの2種類の分析があり、後者の分析の中に“被”の補部が TP で演算子の A' 移動により派生するものと、“被”の補部が VP で名詞句の A 移動により派生するものが提案されているといえることができる。このうち、伊藤 2010 で既に取り上げた“被”を前置詞と見なす説を除き、本稿では、以下の二つの構造を考察する。なお、“被”の文法的位置づけについては、諸説あるが、ここでは、受動態をマークする軽動詞 v とする。

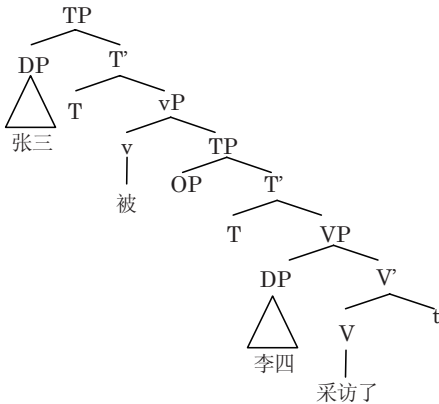


図1：長い“被”構文

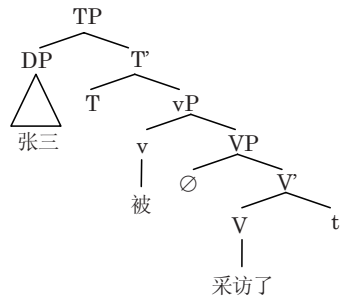


図2：短い“被”構文

3. 描写の対象の違いによる状語のタイプ

伊藤 2010 では、動作が行われる際の心理状態を表す状語が“被”構文に現れた例を収集し、その描写対象を観察して、1) 位置依存性状語、2) 弱い被動作主指向性状語、3) 強い被動作主指向性状語、4) 弱い動作主指向性状語、5) 強い動作主指向性状語の5つのタイプに分類した。しかし、その後、5つのタイプの例文を取り出して、それぞれの状語の位置を入れ替えてインフォーマント調査を行った結果、弱い被動作主指向性状語と弱い動作主指向性状語は、実際には位置依存性状語と同じ振る舞いをすることが分かった³⁾。インフォーマントチェックを経ても、被動作主指向性状語と言えるのは“自願或不自願地”、動作主指向性状語と言えるのは“有意无意地”のみであった。

表 1

分類	例	能動文での修飾対象	“被”構文での描写対象	
			状語 - 被	被 - 状語
位置依存性状語	自觉自愿地、自觉不自觉地、乐意地、不乐意地、不情不愿地、不愿意地、故意地、顺服地	動作主	被動作主	動作主
被動作主指向性状語	自願或不自願地	動作主	被動作主	被動作主
動作主指向性状語	有意无意地	動作主	動作主	動作主

ただし、これらの状語が、焦点化の対象になるときは、以上のような描写対象の傾向は必ずしも守られない。以下の例文では、“故意地”が“无意地”と対比されて焦点となっている。

- (17) a. 有关艺术的规则，有可能被违反：不是无意地被违反，就是故意地被违反。（芸術に関する規則は、違反されることができるとは非意図的に違反されるのではなく、わざと違反されるのである。）（ネ）
- b. * 有关艺术的规则，有可能被违反：不是无意地被违反，就是被故意地违反。

(17) では、焦点マーカー“就是”が現れて“故意地”を焦点化している。“就是”は動詞句の前にしか現れることができないため、焦点化の対象である“故

意地”も動詞句の前、即ち“被”の前に置かれる。意味的には、“故意地”は動作主を描写しているけれど、焦点化されたために表1のパターンに従わないのである。このように、焦点化の操作により、図1で示したような描写の対象と位置の関連が崩れることがあり、本稿では、焦点化がかかっている例文については除外して考察する。

描写の対象と状語の位置の関連を示すと、以下のように表わすことができる。(Pは被動作主、Aは動作主、Vは動詞、Advは状語、iは状語とその描写の対象の関連を示す。)

- (18) a. 位置依存性状語： P_i Adv_i 被 A V / P 被 A_i Adv_i V
- b. 被動作主指向性状語： P_i Adv_i 被 A V / P_i 被 A Adv_i V
- c. 動作主指向性状語： P Adv_i 被 A_i V / P 被 A_i Adv_i V

位置依存性状語は、その直前にある名詞句の指す対象を描写する。一方、被動作主指向性状語は、位置に関わらず被動作主を描写し、動作主指向性状語は、位置に関わらず動作主を描写する。以下、それぞれのタイプの状語について、例を挙げて描写の対象が決まるあり方を見る。

3.1 位置依存性状語

位置依存性状語は、その置かれる位置によって描写の対象が変わる。つまり、“被”の前に現れれば被動作主を、“被”の後に現れれば動作主を描写する。(19a)は“自觉自愿地”が被動作主を描写しているが、(19b)のように“被”の後にあっては被動作主を描写することはできない。一方、(20a)は同じ状語成分が動作主を描写しているが、(20b)のように“被”の前にあっては動作主を描写することはできない。(以下、例文中の省略されている被動作主はP、動作主はAで表す。)

- (19) a. 世界也就是怪事多，如此 P_i 自觉自愿地_i 被 A 绑。(世の中には変なことが多く、このように自ら進んで縛られることもあるのだ。) (ネ)
- b. *世界也就是怪事多，如此 P_i 被 A 自觉自愿地_i 绑。
- (20) a. 你恰好也就『中计』了一封商业广告信函，P 被你_i 自觉自愿地_i 读了一遍。(君はちょうど商業広告メールのわなにはまって、あなた

に自ら望まれて一通り読まれたのだ。) (北)

- b.* 你恰好也就『中计』了一封商业广告信函, P_i 自觉自愿地_i 被你_j 读了一遍。

同様の振る舞いをする状語成分の例には、“自觉”、“自愿”、“乐意”、“情愿”、“愿意”などの語からなる派生語が見られる。冒頭の(3)～(6)がその例の一部だが、いずれも状語の位置を入れ替えると、容認度が下がる。⁴⁾

位置依存性状語の中には、これまで動作主を描写すると考えられることの多かった“故意地”も含まれる。この状語成分は、以下のように、文脈が与えられれば、被動作主を描写することも可能であり、その場合には“被”の前に現れないといけない。これは、位置依存性状語の典型的なふるまいである。

- (21) a. 你作势抓我, 要敲我的头。我逃开, 远远地看着你状极无奈。于是, 再做鬼脸, 逗你抓我。然后, P_i 就故意地_i 被你抓住。(君は私を捕まえる振りをし、私の頭をたたこうとした。私は逃げて、遠くから君がどうしようもない様子なのを見た。そこで、またおどけた顔をして私を捕まえるよう、君をからかった。それから、わざと君に捕まえられたのだ。) (ネ)

- b.* 你作势抓我, 要敲我的头。我逃开, 远远地看着你状极无奈。于是, 再做鬼脸, 逗你抓我。然后, P_i 就被你故意地_i 抓住。

他に、“顺服地”も位置依存性状語に分類される。この状語成分は、動作主を描写する場合は見つからなかったが、被動作主を描写するときには“被”の前に現れないといけないという制約が観察されるからである。

- (22) a. 平静地在所有生物面前铺开, 海面_i 顺服地_i 被船头切开, 几近无声的那种柔软响动, 伴随海浪冲刷船首像的光滑表面, 仿若情人的爱抚。(静かにあらゆる生物の前に広がって、海面は従順に船首に切り開かれ、ほとんど音のないあの柔らかな動きは、波が船首像の滑らかな表面を洗い流すのを伴って、あたかも恋人の愛撫のようだった。) (ネ)

- b. ?? 平静地在所有生物面前铺开, 海面_i 被船头顺服地_i 切开, 几近无

声的那种柔软响动，伴随海浪冲刷船首像的光滑表面，仿若情人的爱抚。

以上のような位置依存性状語は、描写の対象によって違う位置に現れるわけだが、前節で論じた“被”構文の構造を踏まえると、これらの状語は、以下に示した位置、即ち vP か VP の付加語の位置に置かれると考えられる。

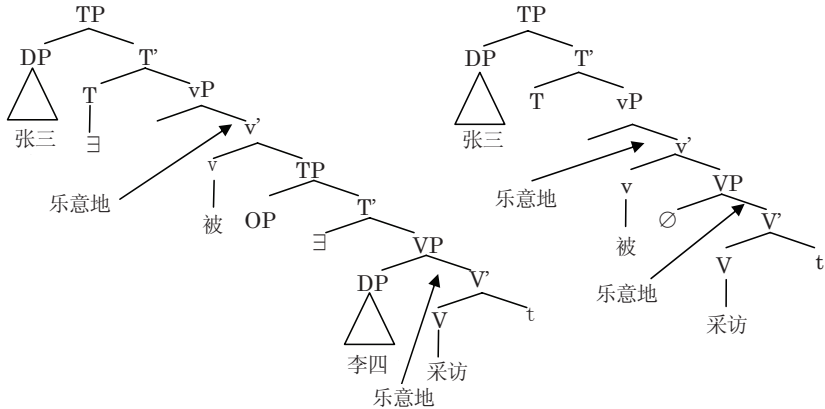


図3：長い“被”構文

図4：短い“被”構文

以下、この構造に沿って位置依存性状語の描写対象がどのように決まるかを述べる。

伊藤 2010 では、Landman2000:lecture 3 の Passive Sensitive Adverbs、例えば“reluctantly”のような副詞に対して提案された意味論をもとにして、以下のような状語の定義を提案した。

(23) M を状語、V を n 項述語、 x_1, \dots, x_n を個体変項、e をイベント項とすると、 $M \rightarrow \lambda V \lambda x_n \dots \lambda x_1 \lambda e [e \in V(x_1, \dots, x_n) \ \& \ M(x_1, e)]^5$

(24) n 項述語 V の定義：

$V \rightarrow \lambda x_n \dots \lambda x_1 \lambda e [e \in V(x_1, \dots, x_n) \ \& \ \theta_m(e) = x_n, \dots, \theta_1(e) = x_1]$
 ($\theta_m, \dots, \theta_1$ はイベント項に対して参加者を指定する関数、例えば Agent, Patient などを指す。)

定義 (23) は、状語は 1 ~ n 個の項をとる述語をとって、同数の項を持ち、か

“被” 構文における状語の描写対象

つその状語の修飾を含む述語を返す関数ということである。ここではイベント意味論を採用しているので、動詞は (24) のようにイベント項を持っており、動作主、被動作主などの各項は意味役割の関数を通じてイベント項と関連づけられる。このイベント項は、T の位置に存在量量子があれば、それに束縛され、一つの事態に関する陳述となる。次に、“被” そのものの働きと、長い“被” 構文を形成する際に必要となる演算子 OP の働きを定義する。

$$(25) \text{被} (\dots t \dots) \rightarrow \lambda x [\dots x \dots]$$

$$(26) \text{OP} (\dots t \dots) \rightarrow \lambda x [\dots x \dots]$$

“被” とこの演算子の働きは同じである。つまり、その作用域内にある空所を抽象化する働きをする。以上の定義を用いると、状語を含む文の意味生成は以下ようになる。始めに長い“被” 構文の場合を見る。(以下、式中では、名詞句をその頭文字で置き換える。)

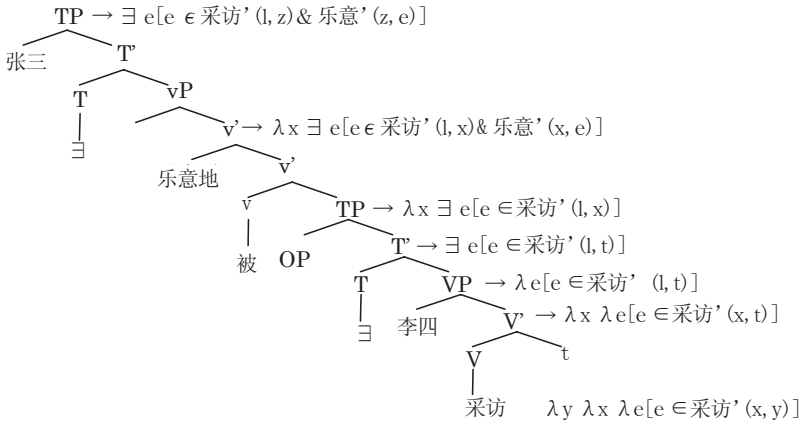


図5：長い“被” 構文での被動作主描写

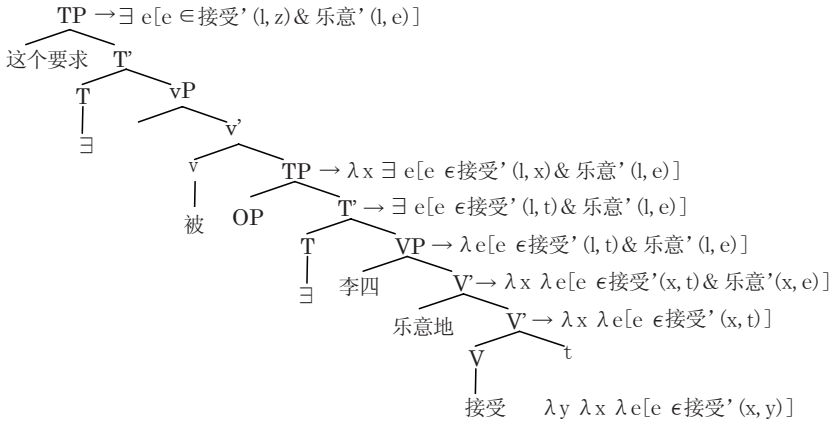


図6：長い“被”構文での動作主描写

以上のように、長い“被”構文に埋め込み文構造を設定し、演算子の移動で受動化を説明すると、派生の過程に二つ問題が生じる。一つは、“被”が何もしないということ、もう一つは、主節のTにある存在量子子が何もしないということである。先に述べたように、“被”とOPの機能はほぼ同じであり、すでにOPが痕跡の抽象化を行ったなら、空所はなくなってしまうため、“被”が何もしないということになる。存在量子子の出現位置については、埋め込み節の動詞がアスペクト辞を伴えるなど、ある程度の自立性があるため、そこに存在量子子があると考えざるを得ない。そのため、イベント項が埋め込み節の方で量化されてしまい、主節の存在量子子は何もしないことになる。これは、“被”を伴わない主題化構文“这个要求, 李四乐意地接受（この要求を李四是喜んで受け入れた）”と意味論的には同じ派生をしているということになってしまう。主題化構文と“被”構文の違いは本稿の考察の対象外であるが、やはり何らかの違いが意味論にも反映されていると思われる。そこで、本稿では、長い“被”構文の“被”にイベント項を解放する働きを提案する。

(27) 被 (∃ e[...e...]) → λe[...e...]

次に、短い“被”構文を見る。

“被” 構文における状語の描写対象

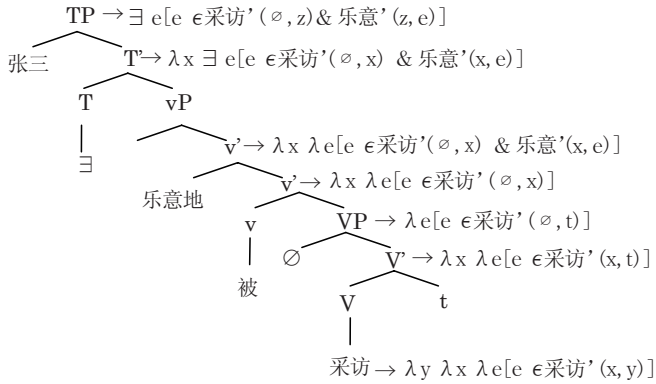


図7：短い“被”構文での被動作主描写

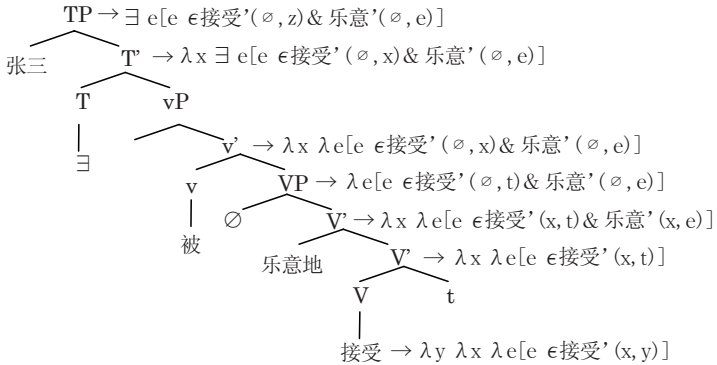


図8：短い“被”構文での動作主描写

短い“被”構文は、被動作主名詞句の移動により生成される。また、動作主名詞句が決して現れないのも特徴である。つまり、式内に二つ空所がある。このため、“被”の操作がかかるとき、間違っ動作主の方を抽象化してしまう恐れがないわけでもない。ただ、ともに音声形式のない代名詞ではあるが、痕跡と非明示的代名詞にははっきりと違いがあると考えられ、問題は生じないだろうと思われる。

最後に、両方について問題となるのは、動詞の能動性の違いが、状語の描写先に影響を与えている可能性である。被動作主を描写している図5と図7は例

(4)、動作主を描写している図6と図8は例(6)を簡略化したものだが、それぞれの動詞“采访”と“接受”には、動作主が動作を行う際に能動的に行動を起こしているか、そうでないかの違いがある。そのため、この二つを入れ替えたとき、それぞれ被動作主、動作主を描写する自然な解釈が得られるとは限らない。つまり、状語の描写の対象は、動詞の持つ意味役割にも影響されていると言える。よって、位置依存性であるといっても、描写の対象となる意味役割の指向性自体は定義に書き込まれており、使用の際にも、解釈の際にも、その指向性に馴染むものが描写の対象になることが多いと思われる。そして、動詞の意味役割の定義と状語成分の持つ描写対象の意味役割の指定については、次に見る動作主指向性状語の定義と類似のやり方で行われていると思われる。

3.2 被動作主指向性状語

被動作主指向性状語は、受動文において常に被動作主を描写する状語である。この振る舞いをする状語には、“自願或不自愿地”がある。(28)は、(28a)が原文であり、“自願或不自愿地”が“被”の前に現れて被動作主を描写しているが、(28b)のように位置を“被”の後に変えても容認される。(29)は、(29a)が原文であり、状語成分が“被”の後に現れて被動作主を描写しているが、(29b)のように“被”の前に変えても容認される。⁶⁾

(28) a. 《广告人》剧组，是一个危机四伏的草台班子，所有的人_i 自願或不自愿地_i 被 A 绑在卢杨的战车上。(「广告人」制作グループは、いたるところに危機をはらんだどき回りの一座であり、すべての人が望むと望まざると盧楊の戦車の上にくくりつけられている。) (北)

b. 《广告人》剧组，是一个危机四伏的草台班子，所有的人_i 被 A 自願或不自愿地_i 绑在卢杨的战车上。

(29) a. 几个在上世纪80年代后出生的年轻人_i，凭借各自手中的某个中小网站、一笔融资，甚至一个概念，便被 A 自願或不自愿地_i 统一“包装”成为一个“80后”系的代表人物。(何人かの前世紀80年代以降に生まれた若い人は、それぞれ手中の中小のサイトや融資や、概念さえによって、望むと望まざると「ポスト80」系列の代表的人物と

して統一的に「パッキング」されてしまった。) (ネ)

- b. 几个在上世纪 80 年代后出生的年轻人_i, 凭借各自手中的某个中小网站、一笔融资, 甚至一个概念, 便自愿或不自愿地_i被 A 统一“包装”成为一个“80 后”系的代表人物。

被動作主指向性状語は、位置依存性状語と異なり、語順の違いで修飾先を変えることがないが、態によって描写の対象が決まる。つまり、受動態では被動作主を、能動態では動作主を描写する。⁷⁾ これは、構造的に最後に結びつく名詞の指示対象を描写すると言い換えることができる。中国語の場合、文頭の名詞句は主題という文法関係を担っているので、それを状語成分の定義に入れて定義すると、以下のようなになる。

- (30) M を状語、V を n 項述語、 x_1, \dots, x_n を個体変項、e をイベント項とすると、

$$M \rightarrow \lambda V \lambda x_1 \dots \lambda x_n \lambda e \exists y [e \in V(x_1, \dots, x_n) \& M(y, e) \& \text{TOPIC}(e) = y]$$

描写対象の文法関係に指定があること (TOPIC(e) = y)、また結合する順序に関係なく、描写の対象があると指定されていること ($\exists y [\dots M(y, e) \dots]$) から、被動作主指向性状語は、位置に関わりなく主題の表わす対象を描写することができる。状語成分が“被”の前に現れた時は、問題なく描写対象を得られるので、以下に状語成分が“被”の後に現れる場合の派生の一部を示す。

- (31) 自愿或不自愿地 (绑 t)

$$\rightarrow \lambda V \lambda x \lambda e \exists y [e \in V(x) \& \text{自愿或不自愿}(y, e) \& \text{TOPIC}(e) = y]$$

$$(\lambda x \lambda e [e \in \text{绑}'(x, t)])$$

$$\rightarrow \lambda x \lambda e \exists y [e \in \text{绑}'(x, t) \& \text{自愿或不自愿}(y, e) \& \text{TOPIC}(e) = y]$$

TOPIC(e) = y という指定があることから、派生の最後に主題を見つけた時に、“自愿或不自愿地”の描写先が定まる。

3.4 動作主指向性状語

動作主指向性状語は、必ず動作主を描写する。この振る舞いをする状語には、“有意无意地”がある。この状語は、動作主の心理状態を描写するのによく馴染み、“被”構文、能動文に関わらず、また位置に関わらず動作主を描写する。

以下、(32)では、もともと(32a)が原文であり、“被”の前にあって動作主を描写したが、(32b)のように“被”の後に置いても容認される。(33)は、もともと(33a)が原文であり、“被”の後にあって動作主を描写したが、(33b)のように“被”の前に置いても、やや容認度は下がるが、容認される。

(32) a. 那些被我们关注到了的, 以及那些有意无意地被我们忽视的故事, 都可能成为对教师和学生的成长与发展卓有意义的教育生活故事。(それら私たちに注目されてきたこと、及びそれらの意図的或いは非意図的に我々に無視されてきた物語は、すべて教師と学生の成長と発展に非常に意義のある教育的ライフストーリーになりうる。)
(ネ)

b. 那些被我们关注到了的, 以及那些被我们有意无意地忽视的故事, 都可能成为对教师和学生的成长与发展卓有意义的教育生活故事。

(33) a. 能收集到的各种现代文学思潮史、理论史、批评史、运动史中他们被A_i有意无意地忽略了。(手に入れられる各種の現代文学思潮史、理論史、批判史、運動史の中で彼らは意図的或いは意図的ではなく無視された。)(北)

b. ?能收集到的各种现代文学思潮史、理论史、批评史、运动史中他们有意无意地被A_i忽略了。

動作主指向性副詞は、能動文、受動文にかかわらず、常に動作主を描写する。これは、描写の対象が動作主であるということが、語彙的に指定されているからであると思われる。

(34) Mを副詞、Vをn項述語、 x_1, \dots, x_n を個体変項、eをイベント項とすると、

$$M \rightarrow \lambda V \lambda x_n \dots \lambda x_1 \lambda e \exists y [e \in V(x_1, \dots, x_n) \& M(y, e) \& \text{AGENT}(e)=y]$$

(34)から分かるように、描写対象の意味役割に指定があること(AGENT(e)=y)、結合する順序に関係なく、描写の対象があると指定されていること($\exists y [\dots M(y, e) \dots]$)から、動作主指向性状語は、位置に関わりなく動作主を描写することができる。以下に状語成分が“被”の前に現れた場合の派生の一部を示す。

ここでは、動詞の項の意味役割の指定が重要な働きをするので、AGENT(e)=x&PATIENT(e)=y の記述を含めて示す。

(35) 有意无意地（忽视 t）

→ $\lambda V \lambda x \lambda e \exists y [e \in V(x) \& \text{有意无意}(y, e) \& A(e)=y] (\lambda x \lambda e [e \in \text{忽视}'(x, t) \& A(e)=x \& P(e)=t])$

→ $\lambda x \lambda e \exists y [e \in \text{忽视}'(x, t) \& A(e)=x \& P(e)=t \& \text{有意无意}(y, e) \& A(e)=y]$

この時点で、A(e)=x という指定が見つかることから、有意无意(x, e) となる。そのほかの派生は位置依存性副詞と同じである。

4. まとめ

以上、“被”構文における中国語の状語の描写の対象の決定されるあり方について、先に“被”構文の構造を明らかにした上で再考した。大きく分けて、構造と現れた位置から決定される方法（位置依存性状語）と、語彙に描写先が指定される方法（被動作主指向性状語と動作主指向性状語）の二つがある。本稿では、この二つの方法のうちどちらをとるかは、語彙によりはっきりと規定されているように示したが、実際の使用状況を見ると、被動作主の描写により馴染むものと、動作主の描写により馴染むものが漠然とした境界ではあるが存在している。例えば、“順服地”は受動文においては、やはり被動作主の描写に馴染むものである。このように、位置依存性の振る舞いと語彙指定性の振る舞いが同時にみられることもあることから、ほとんどすべての状語について語彙指定はあると考えられる。ただ、位置依存性状語の場合は、語順に関係なく描写の対象があるという指定（ $\exists y [\dots M(y, e) \dots]$ ）がないため、緩い語彙指定になるのである。

注

- 1) 例文は、北京大学語言学研究中心のコーパスとインターネット上での検索した結果を主に使用する。北京大学コーパスは（北）、インターネットで検索されたものは（ネ）と記す。それ以外は作例。

- 2) この例文の容認度はあまり高くない。だが、実例で“胡统领…被土匪把他宰了。”(胡旅团长は匪賊に惨く殺された)(李珊 2005)のような例があり、全く容認されないわけでもない。容認度の判断が揺れる一因は、残留代名詞の機能が、指示対象を明確にすることにあるためである。つまり、文が長くなったときに、指示対象を明確にするために残留代名詞が使われるのである。一方、(10a)のような短い例文ではもともとそのような必要はない。そのため、不自然に感じるのでと思われる。
- 3) 収集した例文から、位置依存性状語 8 例、強／弱被動作主指向性状語 11 例、強／弱動作主指向性状語 7 例について、それぞれ状語の位置が“被”の前にあったものは後に、後にあったものを前に変えた例文を作り、本来の例文と並べてどちらが自然か、またどちらも容認可能かどうかを 3 人のネイティブスピーカーに判定してもらった。総例文数 52 (26 組×2) 中、評価の一致したものは 33、3 人中 2 人が一致したものが 11、残りの 4 組 8 例は評価のパターンが一致しなかった。以下、3 人とも容認しなかった例は*、2 人が容認しなかった例は?? とし、容認されない例文と見なす。1 人のみ容認しなかった例は? とし、容認された例文として考える。
- 4) ただし、同じ“自觉”という語を含みながらも、その否定形では、位置を入れ替えても容認される。以下の a は原文で、“被”の前に“不自觉地”があつて被動作主を描写するが、位置を入れ替えた b も容認される。a. “从小学到初中，我们;不自觉地;被 A 卷入奥数的热流中，奥数是否会让我们们的数学学习发生质的改变?”(小学校から中学校まで、私たちは自觉なしに奥数のブームに巻き込まれたが、奥数は我々の数学の勉強に質的な変化をもたらしたのだろうか。)(北)
- b. “从小学到初中，我们;被 A 不自觉地;卷入奥数的热流中，奥数是否会让我们们的数学学习发生质的改变?” 否定形だから被動作主指向的に振る舞う訳でもなく、“乐意地”の否定形を含む次の例では、位置依存性状語として振る舞っている。a. “我有一个朋友，一个大老爷们儿;老大不乐意地;被女朋友拖着进了电影院，竟流下了几滴男儿泪。”(私の友人で、大の男がとてもしやいやながら彼女に連れられて映画館に入ったが、なんと数滴の男の涙を流したのだった。)(ネ)
- b. “*我有一个朋友，一个大老爷们儿;被女朋友老大不乐意地;拖着进了电影

“被”構文における状語の描写対象

院，竟流下了几滴男儿泪。”例が限られるので断言はできないが、“不自觉地”は被動作主指向性状語と考えていいのかもしれない。

- 5) Landman2000では、内包性を説明するために文脈要素Cを入れたM(x,e,C)が提案されているが、本稿では内包性に関する議論はしないため、省く。
- 6) 本文中にあるように、位置に関わらず被動作主を描写するという調査結果が得られた一方で、次のように動作主を描写する例が見つかっている。“他的大半生都在漫游和漂泊当中，吴越、齐赵、梁宋、西北、西南，几乎大半个中国被他_i自愿或不自愿地_j游历到了，他走一路、歌一路、诗一路。”（彼の半生は漫遊と放浪にあり、呉越、齊趙、梁宋、西北、西南、ほとんど大部分の中国は彼によって望むと望まざるとに関わらず遊歴され、彼が行った道には、歌があり、詩があった。）ただし、この原文そのものを良くないと判断する話者がおり、考察からは除外した。
- 7) 厳密には「主題指向性状語」と呼んだ方が正しいと思われるが、動作主指向性状語との対比をしているので、本稿では「被動作主指向性状語」の名称を使う。

参考文献

- 冯胜利 1997 〈“管约”理论与汉语的被动句〉《中国语言学论丛》第1期，1-27页。
- Heim, Irene & Angelika Kratzer 1998 *Semantics in Generative Grammar*. Massachusetts: Blackwell Publishers.
- Huang, C.-T. James 1999 “Chinese passives in comparative perspective”. *Tsing Hua Journal of Chinese Studies* 29, pp.423-509.
- 伊藤さとみ 2010 「心理副詞の修飾構造」中国語と日本語の対照に基づく事象表現の総合的研究（課題番号：19320064）報告書。
- Landman, Fred 2000 *Events and Plurality*. Dordrecht:Kluwer Academic Publishers.
- 黎锦熙 1924 《新著国语文法》北京：商务印书馆。
- 李珊 2005 《现代汉语被字句研究》北京：北京大学出版社。
- 吕冀平 1983 《汉语语法基础》哈尔滨：黑龙江人民出版社。
- Shi, Dingxu (石定栩) 1987 “Issues on Chinese Passive”. *Journal of Chinese Linguistics* 25. pp. 41-70.

- 石定栩 2005 〈“被”字句的归属〉 汉语学报 2005 年第 1 期（总第 9 期），38-48 页。
- Tang, Sze-wing (邓思颖) 2001 “A Complementation approach to Chinese passives and its consequences”. *Linguistics* 39-2, pp.257-295.
- 邓思颖 2004 〈作格化和汉语被动句〉 中国语文 2004 年第 4 期（总第 301 期），291-382 页。
- 邓思颖 2008 〈汉语被动句句法分析的重新思考〉 当代语言学第 10 卷 2008 年第 4 期，308-319 页。
- Ting, Jen 1998 “Deriving the BEI-Construction in Mandarin Chinese”. *Journal of East Asian Linguistics* 7, pp. 319-354.
- 吴庚堂 1999 〈“被”字的特征与转换〉 当代语言学第 1 卷 1999 年第 4 期，25-37 页。
- 吴庚堂 2000 〈汉语被动式与动词被动化〉 现代外语第 23 卷 2000 年第 3 期（总第 89 期），249-260 页。
- 熊仲儒 2003 《汉语被动句句法结构分析》 当代语言学第 5 卷第 3 期 206-221 页。
- 徐杰 1999 〈两种保留宾语句式及相关句法理论问题〉 当代语言学第 1 卷 1999 年第 1 期，16-29 页。